

水海道方言の4つの斜格*

佐々木 冠 (筑波大学)

ダニエラ・カルヤヌ (筑波大学大学院)

キーワード：意味格、斜格、family resemblance、名詞句階層

0 はじめに

標準語の格助詞「に」は意味的に多岐にわたる用法を持つ形態素である。水海道方言では標準語の「に」の使用領域で5つの格助詞-ngani, -nge, -sa, -ni, -e が用いられている。本稿では、このうち-ngani, -nge, -sa, -ni の4つの格助詞の用法を明らかにしたい¹。なお、この4つの格助詞の用法を明らかにするためには、この4つ以外の格助詞とこれらの対立をも問題にすべきではあるが、本稿ではもっぱらこの4つの格助詞の間の対立関係と重複関係をもとにその用法を明らかにしていくことにしたい。水海道方言の格助詞すべてで構成される体系の中でのこの4つの斜格格助詞の位置付けは今後の課題とし、さしあたり問題としない。

本稿の構成は次の通りである。1節では先行研究の紹介を通してこの方言の概略を述べるとともに、我々の行った調査の概要とデータの表記法

*本稿は、1995年に書いた同名の未刊行草稿の改訂版である。この草稿に対して、金水敏、角田多作、橋本修、松村一登の各先生方から有益なコメントをいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。今回の改定にあたり、諸先生方からいただいたご教示を生かすことができなかつた点があるとすれば、その責任が筆者にあることは言うまでもない。なお、本研究は学内プロジェクト研究費（筑波大学、課題：水海道方言の文法記述）の助成を受けたものである。

¹本稿では、格助詞-eは考察の対象から外す。この格助詞は、先行研究では格助詞-saと同じ無生の「ゆきさき格」と分類されている。実際、格助詞-eは、ほとんどの用法において格助詞-saと交換可能である。格助詞-saではなく、もっぱら-eが用いられるのは、*egi-e-no mizi*（駅への道）のような連体修飾環境である。このような環境では-saを用いることはできない。本稿は、連用修飾構造における斜格格助詞の用法の記述を目的としているので、-eは考察の対象から外すことにした。

を示す。2節では、-ngani, -nge, -saの用法の意味的特性を記述し、3節では-ngeと-sa、-nganiと-ngeの用法上の重なりと-niと他の格助詞の対立と重複を記述するとともに、「無標の斜格」としての-niの位置付けを明らかにしたい。4節ではいくつかの残された課題について述べたい。

1 前提となる事柄

1.1 水海道方言の概要

我々がここで水海道方言と呼ぶものは茨城県南西部の水海道市を中心とする地域で話されている言葉である。茨城県方言を3分割する説に従うと茨城県西部方言ということになる。この方言の格助詞の体系は隣接する埼玉県方言(井上1984)と共通する面が多い。この方言の音韻体系および形態・統語論的特徴は宮島(1956, 1961)に描かれている。

音声的特徴としては、母音間閉鎖音・破擦音の有声化現象と「ジビズブ」の無声化が上げられる²。また、標準語の「ゆ」や「ゆう」に対応する音は中舌よりの狭母音として実現するアクセントに関しては、茨城県の他の地域と同様に無アクセント方言である。以上の音声的特徴を持つこの方言の表記法として、本稿では次の表記法をとることにする。母音に関しては、「a, i, u, e, o」は標準語のそれと近似した音価を持つ音を表わすものとする。「u」は非円唇母音である。「i」は、標準語の「ゆ」に対応する箇所などに出現する中舌化した狭母音である。「V:」は長母音を示す。母音の無声化は母音の脱落と見なし、無声化した母音は母音としては表記しない。子音に関しては、「p, t, k, b, d, g, m, n, s」は標準語のそれと近似した音価を持つ音を表わす。「h」は後続する母音とほぼ同じ調音位置で発音される無声摩擦音を表わす。「j」は硬口蓋わたり音を表わし、「Cj」は口蓋化した子音を示す。「ng」は「ガ行鼻濁音」である。「N」は撥音を示すことにする。先行研究から引用したデータは、先行研究の表記(カタカナ表記)のままとする。

水海道方言の形態論的特徴に関しては、本稿に関与的な格助詞の体系についての概観にとどめる。先行研究(宮島1956)で示された格助詞体系を我々の表記で表わすと次のようになる。

²これらのプロセスは現在では生産性を失いつつあり、標準語の無声子音がつねに有声子音になって対応しているわけではない。

(1) 水海道方言の格助詞：

先行研究の名称	いきもの	もの	本稿の名称
はだか格	-φ	-φ	主格
目的格	-godo	-φ	対格
ゆくさき格	-nge	-sa, -e	与格
場所格(連用)	-ni	-ni	位格
能力格	-ngani	---	経験者格
道具格	-de	-de	具格
もちぬし格	-nga	-no	属格
場所格(連体)	---	-na	場所格(連体)

このように、水海道方言の格助詞は、いくつかの格で有生名詞に付属する格助詞と無生名詞に付属する格助詞が形式上対立している³。

着点を表わす-sa またはそれと起源を共有すると思われる形式を持つ方言や、着点を表わす-nge またはそれと起源を共有すると思われる形式を持つ方言は少なくない。前者は、東日本では関東・東北そして西日本では九州に分布している。後者は、九州以南に主に分布し、東日本では八丈島と茨城県西部および埼玉県と栃木県の一部に分布している。2つの着点を表わす形式はともに日本の歴史的な中心地を囲む形で分布している。

水海道方言では2つの着点を表わす形式が共存しさらに経験者を表わす-nganiを有するため、標準語で「に」で表わされる領域が形式上きめ細かく分割されている。

1.2 調査

本稿のデータは、1994年から水海道市に隣接する岩井市で60代の話者に行った調査と1995年に水海道市で60代から80代の話者に行った調査で得られたものである。調査に協力してくれた話者は30名にのぼる。上記の表記法で示されている例文はすべてこの方々から教わったものである。調査のために貴重な時間を割いて下さった方々に感謝の意を表わしたい。

³なお、-sa は話者によって-se になる場合があるが、ここでは-sa で代表させることにする。また、-godo, -gara などは子音を無声音で発音する話者が、これも-godo, -gara で代表させる。

2 意味格: -nge, -sa, -ngani

2.1 -nge

ほとんどの話者によって用いられている NP-nge を含む構文は、(3) に示す 3 項動詞 (授受動詞) を主要部とする構文である。なお、(2) の表の数字は人数を表す。

(2) 対応する標準語	NP-nge を使う話者	構文タイプ
(誰々に) くれる	19	授受動詞 (物質移動)
(誰々に) 食わせる	19	使役文 (他動詞文から)
(誰々に) 頼む	18	授受動詞 (情報伝達)
(犬に) 触る	16	接触動詞 (対象=有生)
(馬に) 乗る	13	動作動詞 (対象=有生)
(誰々に) 似ている	12	類似動詞 (対象=有生)
(誰々に) 親切だ	8	形容動詞 (受益者補語)
(誰々に) でかい	6	形容詞 (描写の基準)
(仏様に) あげる	3	授受動詞 (着点=霊的存在)
(誰々に) 寒い	3	形容詞 (描写の基準)
(先生に) 向いている	2	関係動詞 (描写の基準)
(バイクに) 乗る	1	動作動詞 (対象=有生)

- (3) a. ome-nge kure-ru. 授受動詞 (物質移動)
 あなた-与 (着点) あげる
- b. ano hjto-nge tsjkurappo it-tsjat-ta. 授受動詞
 あの-人-与 (着点) 嘘-対 言ってしまった (情報伝達)
- c. zimueng-nge tanoN-tsj-kj-ta 授受動詞 (情報伝達)
 事務員-与 (着点) 頼んできた

これらの構文はすべて項構造において動作主、移行の対象、移行の着点という 3 つの項を含んでいる。(3a) と (3b, c) は、移行の対象は具体的なものであっても抽象的な情報であってかまわないことを示している。

上記の例では、すべての構文で行為の着点が生有でしかあり得ないため、必然的に有生の「ゆきさき格」である -nge が用いられる。同様に行為の着点が生有でしかあり得ない構文に (4) の受益構文がある。

- (4) mango-nge kore kose-da-Nda
 孫-与格 (受益者) これ-対 作ったんだ

一方、3 項動詞でも着点が生有の場合もあれば無生の場合もある場合は、以下に示すように有生の着点には -nge が用いられ、無生の着点には -sa

が用いられる。

(5) a. *hjtō-nge mizu bukkage-N-zja-ne.*

人-与(着点) 水-対 かけるんじゃない

b. *gohaN-sa natto kage-de tabe-tsi-mae*

ご飯-与(着点) 納豆-対 かけて 食べてしまえ

なお、こうした構文で-*nge* や-*sa* の代わりに-*ni* が使われる例については後述することにする。

これらの典型的な用例のほか、以下に示す2項動詞を含む構文でもNP-*nge* が用いられる。

(6) a. *ozitsjaN-nge naate-de kj-ta* b. *uma-nge nor-u*

お爺さん-与(着点) 名宛てで 来た 馬-与(着点) 乗る

c. *ano inu-nge sa:t-to kuttsugare-N-do*

あの犬-与(対象) 触ると 食いつかれるぞ

これらの2項動詞は、着点・対象が無生の場合は名詞に-*sa* が付属する。

(7) a. *ora-tsj-a dare-mo ki-ne:*

私の家-与(着点) 誰も-主 来ない

b. *baeku-sa not-te-N-be*

バイク-与(着点) 乗っていこう

c. *kore-sa sa:t-tsj-a dame-da*

これ-与(対象) 触ってはダメだ

2項動詞では上記の例のように有生・無生双方の着点をとる動詞もあるが、(8)の例のようにもっぱら無生の着点をとるものもある。

(8) *mitskedo-sa eN-be*

水海道-与 行こう

(8)の構文の場合着点が生有であることはありえない。この場合、(3)の3項動詞の場合とは反対に、着点が無生であることが義務的である。仮にある人物のもとに行くという動作を表わすとするならば、「-*tsj*(=～の家)」

などの形態素を人間名詞に付加することによって場所化を行う。eng-を主要部とする構文には NP-nge は出現し得ない⁴。

上記の2項動詞と3項動詞構文において共通している点は次の2点である。

- a. 述語によって表わされる行為が NP-nge で表わされる項に向けられたものであること。
- b. NP-nge で表わされる項が述語で表わされる行為の終着点を意味すること。3項動詞の場合には、NP-nge は、物質または情報の着点を示し、2項動詞の場合には、述語で表わされる行為が完結した地点を示している。

この2つの共通点ゆえに、上記の例文の NP-nge は [+directed](a.) と [+contact](b.) という素性を共有しているものと考えられる。ただし、全ての NP-nge の用例が2つの素性を含んでいるわけではないようである。以下に示す文に現われる NP-nge は [+contact] の素性を欠いているように思われる。

- (9) a. odogo-nga oNna-no hjto-nge hore-de-ru
男-ガ 女の人-与 惚れている
- b. hamono hjto-nge muge-de-...
刃物-対 人-与 向けて...
- c. seNse-nge muede-be d. urusi-nge nide-ru.
先生-与 向いているだろう 漆-与 似ている

これらの構文では NP-nge 以外の項が NP-nge で表わされる項に接触することは含意されていない。しかし、述語によって表わされる行為 (9b) または状態 (9a, c, d) が方向性を含んでいることは明らかである。したがって、こうした用法においても NP-nge で表わされる名詞句は [+directed] の素性を持っていることになる。

標準語には「教える」「教わる」のように語彙的に関連のある動詞が、ともに「NP-に」をとる。この場合、その「NP-に」が担う意味役割が異なる

⁴語彙概念構造における着点の有生性の前指定は、3項動詞の場合 [+animate] のかたちで起き、2項動詞の場合 [-animate] の形で起きているようである。

る。「教える」の「NP-に」は着点であり、「教わる」の「NP-に」は起点である。また、「聞く」のように動詞が同じ形でも「NP-に」が場合によって異なる解釈を受ける場合がある。

- (10) a. 彼女が 彼に 駅への道を 教えた NP-に=着点
 b. 彼は 彼女に 駅への道を 教わった NP-に=起点
 c. 彼は その問題について 先生に きいた NP-に=着点
 d. 彼は その話しを お爺さんに きいた NP-に=起点
 e. 子供に もらった NP-に=着点
 f. 親に もらった NP-に=起点

(10b, d, f)の「NP-に」はそれぞれ、「NP-から」で置き換えることが可能である。岩井市や水海道市で話されている方言では、(10a, c, e)の「NP-に」に対応する表現はNP-ngeで表わすことが可能だが、(10b, d, f)の「NP-に」で表わされる表現はNP-ngeで表わすことが出来ない：

- (11) a. mango-nge ose:-ru. NP-nge=着点 (10a)
 孫-与 教える
 b. *oga:saN-nge osa:t-ta. *NP-nge=起点 (10b)
 お母さん-与 教わった
 c. oga:saN-ni osa:t-ta. NP-ni=起点 (10b)
 お母さん-位 教わった
 d. tomodazi-nge ogane kas-togi NP-nge=着点
 友達-与 お金-対 貸すとき
 e. *to:tsjaN-nge kar-i-tsj-kj-ta *NP-nge=起点
 お父さん-与 借りてきた
 f. togae-no hjto-ja maziba-no hjto-nge kjk-togi wa... .. NP-nge
 都会の人や町の人-与 聞くときは... =着点 (10c)
 g. sono hjto-ni ki:-da hanasi-wa dare-nge-mo moras-a-nae-gaN-na.
 その人-位 聞いた話-トピック 誰-与-も 洩らさないからな
 NP-ni=起点 (10d)
 h. *dorobo: ziNsa-nge tskamat-ta. *NP-nge=動作主
 泥棒-主 巡査-与 捕まった (動作の起点)

- i. dorobo: ziNsa-ni tskamat-ta. NP-ni=動作主
泥棒-主 巡查-位 捕まった (動作の起点)
- j. darega-ni hku-demo morat-te. NP-ni=起点 (10f)
誰か-位 服-対-でもらって
- k. sajuri-nge morat-ta. NP-nge=着点 (10e)
さゆり-与 もらった
- l. odogo-nga oNna-no hjto-nge hore-de-ru NP-nge=感情
男-ガ 女の人-与 惚れている の対象 (9a)
- m. *oNna-nge mode-ru. *NP-nge=経験者
女-与 もてる (感情の起点)

NP-nge は行為の着点を表すことは可能だが、行為の起点を表すことはできない。このことから NP-nge で現われる名詞句は [+directed] の素性を持っていることがわかる。

使役構文や受益構文といった派生的な構文に現われる NP-nge もまたこの素性を持っている。使役構文における被使役者と受動文における「意味上の主語(抑制された外的項)」は、いずれも動詞の形態論的派生に伴って生じた斜格要素であり、標準語ではともに「に」で表わさる。一方、この方言では、両者は、以下に示すように異なる形式で表現される。

- (12) a. mango-nge enu-nge sa:r-ase-ne:
孫-与 犬-与 触らせない
- b. seNse-ni ogor-are-da c. *seNse-nge ogor-are-da
先生-位 怒られた 先生-与 怒られた

(12a) のような被使役者は項構造において使役行為の被り手と解釈されるものであり (Alsina 1992)、 [+directed] として解釈可能である。なお、ここでは -nge が付属する名詞が 2 つ存在しているが、 inu-nge の方は動詞語幹によって選択されている [+directed] の項であるのに対し、 mango-nge の方は使役形態素に [+directed] の項として選択されている。一方、受動文の意味上の主語は動作の被り手というよりは動作を発する側であり、着点としての解釈が不可能である。NP-nge という形をとることが出来ないのは、このためと考えられる。

受益構文には、(4)に示した動詞に+ α の要素が加わらないタイプの他、「動詞+て」に後接する要素の性質によって異なるいくつかのタイプがある (Uda 1994)。以下に示すように受益者を主語とし受益行為の送り手を斜格として表わすフレームをもつ「~てもらう」タイプの構文では、標準語で「に」でマークされる名詞句を-ngeでマークすることが出来ない。

- (13) a. kodomo-nge hku kat-te jar-a-ne V-te jar-u
 子供-与 服-対 買ってやらない
- b. hana-nge mizu kure-de kuro V-te kure-ru
 花-与 水-対 くれてくれ
- c. *kodomo-nge joN-de mora: V-te mora:
 子供-与 読んでもらう
- d. to:tsjaN-ni ki:doe-te mora:-be: V-te mora:
 お父さん-位 聞いておいてもらおう
- e. sajuri-nge kose-de morat-ta. V-te mora:
 サユリ-与 作ってもらった

(13a, b)の jar-, kure-を用いる受益者構文では受益者が NP-nge の形をとっている。これは、受益者が受益行為に関して [+directed] の素性を持つためと考えられる。一方、mora:を補助動詞とする構文 (13c, d) では受益者は主格となり、受益行為の起点である動作主は斜格 (NP-ni) である。そして、標準語で「に」が付与される場所に-nge が現われることが出来ない。(13e)において「~てもらう」タイプであるにもかかわらず受益者が-ngeでマークされているのは、この NP-nge が「~てもらう」に選択されているのではなく、動詞語幹 (kose-) によって選択されているためである。「~てもらう」タイプの受益者構文は、動作主が NP-ni で現れる点で、受動文と共通点を持っている。

これまで、主に動詞を主要部とする構文について見てきたが、NP-nge は形容 (動) 詞文にも出現する。

- (14) a. tosjori-nge siNsezu-da. b. enu-nge mottaene:
 年寄り-与 親切だ 犬-与 もったいない

(14)でNP-ngeで表わされている名詞句は、意味的素性として[+directed]と[+contact]を潜在的に持っている。なぜなら、(14a)の場合、親切の被り手を表わしているし、(14b)の場合、「もったいないもの」の潜在的な受け手を表わしているからである。これらの構文のNP-ngeは、意味的な特性としては(3)の3項動詞構文のNP-ngeと同じである。しかしながら、全ての話者がNP-ngeを使うというわけではなく、何人かの話者はNP-ngeではなくNP-niを使うべきだという判断を示している。これは、構文の主要部が動詞ではなく形容(動)詞であるからかもしれない。

上記の例文でNP-ngeで表わされていた名詞句はいずれも[+directed]の素性を持つものであった。しかし、以下に示す例文に現われるNP-ngeは起点の読みこそないものの[+directed]の素性を持っているとは解釈しがたいものである。

(15) a. ore-ngani-wa dekkae-na

私-経-トピック 大きいな

b. tosijori-nge samue-jo, sotts-i-wa

年寄り-与 寒いよ そっち-トピック

これまで、挙げてきた例文はすべて、文の命題的意味を変えずに-ngeを-nganiに置き換えることは不可能だが、(15)の例文は、NP-ngeをNP-nganiに置き換えても命題的意味が変わらない。[+directed]の素性を欠いている点と-ngeと-nganiが互換性を持っている点で(15)の例はこれまでの例と異なる。こうした例を含めて-ngeの性質を規定するには、用例に一貫する素性を指摘するのは別の分析が必要となる。2.4では、この問題に関して、family resemblanceの概念に基づく分析を行うことにする。

2.2 -sa

-saが用いられやすいのは、前節の(5), (7), (8)に対応する無生の着点または対象名詞句を含む構文である。

(16) 対応する標準語	NP-sa を使う話者	構文タイプ
(どこそこに) 行く	21	移動動詞 (着点=無生)
(見に) 行く	19	目的の補文標識
(服に) 触る	19	接触動詞 (対象=無生)
(バイクに) 乗る	13	動作動詞 (対象=無生)
(バスに) 乗る	10	動作動詞 (対象=無生)
(馬に) 乗る	10	動作動詞 (対象=有生)
(犬に) 触る	8	接触動詞 (対象=有生)
(風呂に) 入れる	6	授受動詞 (着点=無生)
(仏様に) あげる	5	授受動詞 (着点=霊的存在)

この用法に関しては、-sa は、-nge と有生性において対立しているといえる。また、-sa は名詞の格助詞としてだけではなく、目的節や行為の目的となる event nominal を導く補文標識としても用いられる。

(17) e:nga mi-sa eng-u
映画-対見-与 行く

前接する要素こそ格助詞の場合とは異なるが、主節で表わされる行為の潜在的な到達点としての目標/目的を表わしているわけだから、意味的にはこれまでに出了た格助詞の用法と共通する点があるといえるだろう⁵。

しかしながら、NP-nge の場合と同様、NP-sa の場合にも [+directed] と [+contact] の双方を含むとは認めがたい。

- (18) a. nani-sa ni-de-ru? 類似の対象
何-与 似ている
- b. kuwa-no aeda-sa tskut-ta-Nda-gedo-jo. 出現の場所
桑の間-与 作ったんだけどよ
- c. kogo-sa aNmari tska-ne: 使用の場所
ここ-与 あまり 使わない

(18a) は [+contact] の素性こそ持たないが、(9d) の場合と同様、述語が状態の方向性を示している点で、[+directed] を含むものと思われる。しかし、(18b, c) には [+directed] も [+contact] も認めがたい。-sa の場合にも -nge の場合と同様こうした周辺の用法をも含めて意味的な定義を与えるためには、用例に一貫する素性を指摘するという方法は不適切と思われる。-nge

⁵Lakoff (1993) にも「行き先」としての「目的」という分析がある。

にせよ-sa にせよ主格や対格といった文法格ではない。従って、何らかの形で意味的な定義を行なわなければならない。こうした形式を記述するためには、後述するように family resemblance の概念に訴えるべきであるように思われる。

2.3 -ngani

NP-ngani は、標準語における与格主語と似た分布をしている。標準語において与格主語をとる構文には「所有・可能・必要を中心とした概念を表わす状態述語（動詞・形容詞・形容動詞）」(柴谷 1978:223)を主要部とするものが多いとされる。岩井市・水海道市で話されている方言の場合、動詞文では、このうち可能および必要を表わす構文で、NP-ngani が用いられる。所有もしくは存在を表わす構文では用いられない ((19e) 参照)。

- (19) a. ore-nganja so:i-no wagaN-ne-gara
私-経-トピック そういふの わからないから
- b. muko:-no sjtodazi-nganja sungogu: kjtsug-u kjkoe-da
向こうの人たち-経-トピック すごく きつく 聞こえた
- c. ore-ngani-wa mie-ru
私-経-トピック 見える
- d. ore-ngani sore-nga era-ne.
私-経 それ-ガ 要らない
- e. *ore-nganja kane-nga nae.
私-経-トピック 金-ガ ない

NP-ngani で表わされている名詞句は、広い意味で経験者として解釈されるものである。

以下に示す例文は、可能表現における NP-ngani の用例である。NP-ngani をとる構文の主要部は、内在的に能力表現である動詞 (19a) であっても、派生的に可能表現になった動詞でも構わない。

- (20) a. are-nganja e:ngo sjaber-e-N-nga...
彼-経-トピック 英語-対しゃべれるが...
- b. ora-nganja ojong-e-ru.
私-経-トピック 泳げる

(20b)のように自動詞をもとにした構文の場合、主格の1つもない文になる。筆者の調査した範囲ではこうした構文に「座りの悪さ」を感じる話者はいなかった。標準語では(21)のように主格を全く含まない文に「座りの悪さ」を感じるため、自動詞から可能構文を派生した場合、主語を与格ではなく主格にすることが報告されている(柴谷1978)⁶。

(21) *来年僕にアメリカに行けそうだ。(柴谷1978:253)

水海道方言では、(20b)のように派生によって主格が1つもない文が出来るので、1つの節につき最低1つの主格が必要(Shibatani 1977:807)というわけではなさそうである⁷。

NP-nganiは動詞文だけに出現するわけではない。以下の例文は形容(動)詞文にも出現することを示している。

(22) a. ome-ngani muri-da-na b. ore-nganja waji:ne:
 あなた-経 無理だな 私-経-トピック 簡単だ
 c. ore-nganja dame-da
 私-経-トピック だめだ (=無理だ)

(22)の例文は、主要部こそ動詞ではないが、NP-nganiが能力者を表わしている点では(19a, b, c)や(20a, b)と同様であり、動詞文と意味役割に関して共通する側面がある。

標準語で「~にとって」で表わされる語句は、「描写の基準」(point of reference、以下 p.o.r.)を表わすことがある。NP-nganiはこうした語句に対応する場所にも現われる⁸。

(23) a. tosjori-nganja sami: b. ore-ngani-wa dekkae-na.
 年寄り-経-トピック 寒い 私-経-トピック 大きいな
 c. ore-nganja hade-ga-na
 私-経-トピック 派手かな

⁶「もし文中に主格名詞節がない場合は、与格主語の主格化(すなわち、主語助詞規則(イ)の適用)は義務的である。」(柴谷1978:253)

⁷Shibatani(1977)の一般化は標準語に関するものだが、標準語と岩井・水海道方言の違いを際立たせるため、参照した。

⁸「~にとって」に対応する表現でNP-nganiが用いられるという事実は、1992年に大橋勝男先生によって指摘された。

これらの例文は、2.1でも指摘したように、文の命題的意味を変えずに NP-ngani を NP-nge に変えることが出来る構文である。しかし、この交替において -ngani と -nge は全く等価ではなく、交替を許さず一方しか使えないとする話者の場合、NP-nge ではなく NP-ngani を選んでいる。この NP-ngani と NP-nge の分布上の重なりに関しては次節で詳しく述べたい。

NP-ngani の用法に関して最後に、形容（動詞）文に現われるすべての経験者を NP-ngani で表わせるというわけではないことを指摘しておく。

- (24) a. *ore-ngani gi:ni: kirae b. *ore-ngani nemue
私-経 牛乳 嫌い 私-経 眠い

これらの構文は、標準語でも「～にとって」または「～に」を用いることが出来ないものである。これらの構文で NP-ngani を使うことが出来ない要因については、次節で -nge, -sa, -ngani の意味的特質を考える中で明らかにしたい。

2.4 Family Resemblance

水海道方言の3つの格助詞、-nge, -sa, -ngani は上記の記述から明らかなように文の意味に反映される意味内容を持っている。-nge, -sa, -ngani は、「が」と「を」のような意味的に空の形式ではない。この点では、水海道方言におけるこれらの3つの格助詞は標準語の「から」および「へ」に近いと見なすべきである。しかしながら、標準語の「から」および「へ」の意味役割は比較的簡単に定義できるのに対して、-nge, -sa によってマークされる名詞句が担う意味役割をある1つの特徴を用いて定義することは困難である。つまり、「から」は「起点」、「へ」は「着点」として記述できるが、-nge と -sa の場合は、1つの特徴によって、すべての用法を規定することは不可能と思われる。

3つの格助詞は明らかに意味内容を持っている。しかし、この意味内容は、様々な用法に共通な1つの特性としては定義できない。この矛盾を解決するために、-nge と -sa の使用領域を古典的なカテゴリーとしてではなく、family resemblance の概念を用いて記述することを試みる。family resemblance とは Wittgenstein (1953) が提案した概念で、一貫した共通特性でくくることのできない集合（たとえば様々なゲーム）を1つのカテゴ

リーとして捉えるためのものである。

「それら全てに共有されている何か或るものを見出す事はないとしても...」「相互に重なりあい交差しあう種々の一そして、大きな或いは小さな類似性の網状組織を見るのである。」「私はこの類似性を「家族的類似性 (Familienähnlichkeit) という語による以外、より良く特徴づける術を知らない；何故なら、家族のメンバーの間に成り立つ一体格、顔つき、眼の色、歩き方、気質、等々に於ける一 種々多様な類似性は、当にそのように相互に重なりあい交差しあっているのだから。」(「哲学的探究」黒崎宏訳, 56-7 より)。

この概念は、言語記述にも有効なものと考えられている (Rosch & Mervis 1975; Lakoff 1987)。

先に述べたように -nge と -sa の様々な用法をある1つの素性を用いて、統一的に記述することは不可能である。各々の用法は部分的にだけ共通している。さらに、それぞれの用法同士では共通する部分が異なる。それゆえに、離れている用法の場合は、共通点が少なく、同じカテゴリーに属すると思われなほどである。しかし、カテゴリー全体を見ると1つの連鎖を成している。つまり、隣接する用法の共通点によって結ばれた連鎖が一見かけ離れているように見える用法をつないでいるのである⁹。

-nge の各用法は次のような形で意味的な連鎖を形成しているものと考えられる。2.1 では -nge の主な用法は着点の意味役割を持っている名詞句をマークすることであると指摘した。-nge を含む多くの例文は3項動詞(授受動詞)を述語にしている構文である。ほぼ同じ頻度、許容度を持つ例は「乗る」「さわる」のような2項動詞を含む構文である。この2つのクラスは [+directed] と [+contact] を共有している。2つのクラスを区別するのは、項の数の他に、着点という意味役割を担う名詞句の有生性である。つまり、授受動詞の場合は、着点をもっぱら有生であるのに対して、「乗る」クラスの場合は着点は有生と無生のどちらでもあり得る。

-nge は「向ける」や「惚れる」などの補部をマークする用法がある。投

⁹典型的な family resemblance の場合は、すべてのメンバーは等価である。しかし -nge と -sa の様々な用法の中にはより中心的な用法と周辺的な用法がある。こうした混合カテゴリーの存在はすでに Lakoff (1987) に指摘されている。

げるつもりがない場合でも、相手にナイフを向けることが可能であるし、自分の気持ちを伝える意図がなくても相手にほれることが可能である。このことから、これらの NP-nge には [+contact] の解釈が困難である。仮に [+contact][+directed] の項が着点であるとする、この場合の NP-nge は着点の解釈ができないことになる。

「似る」のような述語は何らかの方向性を持っているものと思われる。したがって、-nge が「似る」の補部をマークする例文も上のクラスに入れることができる。一方、「似る」の項は方向性という素性の他に「描写の基準」という素性がある。この素性は形容（動）詞文における-nge 項と共通している。

前節で述べたように、-nge は形容（動）詞文における「描写の基準」を表す例がある。この構文では NP-nge は述語が表わす属性を計る基準の役割を果たしている。述語が表わす属性を持っている対象物は-nge でマークされるものと直接に関係を持たないかぎり、-nge を用いることができないと考えると、この項は [+contact] という素性も持っていると言える。つまり、自分が着たと仮定して、自分の体に大きいか小さいかと判断する場合に (25) を用いることが可能となる。「寒い」などの場合、「年寄り」（経験者）がある場所にいると仮定して、その場所の温度をどのように感じるか判断することによって、(26) を使うことになる。

(25) ome-nge-wa ega-sungi-ru
 あなた-与-トピック 大きすぎる

(26) tosijori-nge-wa samu-gaN-be
 年寄り-与-トピック 寒いだろう

この用法の場合、-nge でマークされる項が必然的に有生であることを指摘しなければならない。-nge の用法の範囲を決定する family resemblance は図1のように構成されているものと考えられる。

以上、-nge の用いられる各用法が family resemblance によって連鎖を形成していることを見てきた。それぞれの用法は構文の主要部（形容詞や動詞）と名詞句そしてそれをつないでいる格助詞-nge の間の相互作用の産物である。

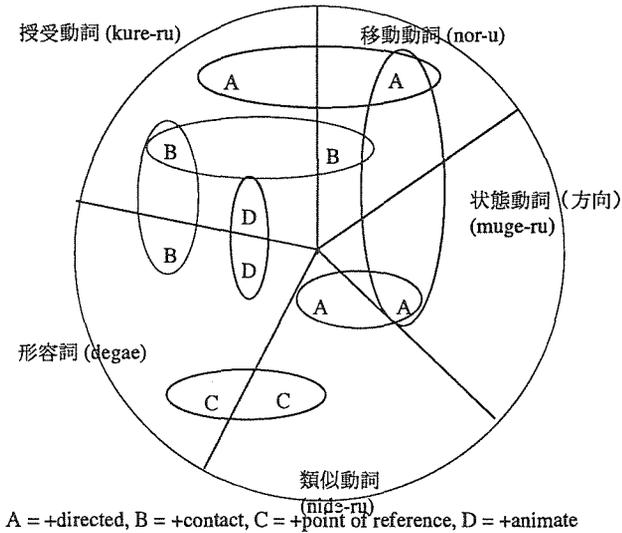


図 1: -nge の用法間の family resemblance

-sa の使用領域を意味的に定義することは、-nge に比べると容易であると思われる。-sa には 5 つの主な用法がある。その内の 1 つは 3 項動詞文における -nge の用法に対応するものである。この用法は -nge の場合と同様 [+directed] と [+contact] の素性を含んでいると考えられるが、-nge の場合と異なる点は、-sa が用いられる構文の場合は着点の意味役割を担っている項が無生である点である。もう 1 つの用法は、移動動詞文における -sa の使用である。この 2 つのタイプの構文の述語の意味情報には着点名詞の有生性に関する指定が含まれていない場合がある。「似ている」のような状態動詞は、既に挙げた 2 つのクラスと同様に動詞の意味情報として有生性が指定されていないため、-nge と -sa の両方の表現をとることができる。この述語の場合、前 2 者とは異なり [+contact] は含意しないものの、2.2 で述べたように [+directed] を含意するものと考えられる。したがって、この 3 つのクラスの述語は [+directed] という素性を共有していることになる。

-sa のもう 1 つの用法は動作の行われる場所をマークすることである (18b, c)。この用法では述語には [+directed] という素性がない。しかしながら、

この用法で用いられる NP-sa は動作が行なわれる場所を示しているため、3項動詞や移動動詞と [+contact] という素性を共有しているものと考えられる。また、この用法の述語は3項動詞や移動動詞と [+activity] という素性を共有していることも動詞の意味から明らかである。なお、この用法の場合、NP-sa は場所として解釈されるので内在的に有生性に関しては [-animate] である。

-sa には、上に述べた格助詞としてのさまざまな用法のほか、補文標識としての用法があることは、2.2 で見たとおりである。この用法は行為の目的を表わしているわけだから、[+directed] を持つほか、達成すべき目標を明示しているわけだから潜在的に [+contact] を持っているといえるだろう。この点はこの用法と、3項動詞や移動動詞とともに用いられる用法との共通点となっている。また、この用法は主節の動詞が動作動詞の場合に用いられるので、[+activity] の素性も持っているものと考えられる。また、前接する要素の有生性について考えると、目標や目的といったものが有生として解釈されることはありえないので [-animate] であるといえる。補文標識としての用法は、[+contact][+activity] に関して、3項動詞文、移動動詞文、動作動詞文における用法と共通点を持っている。さらに、[-animate] に関しては動作動詞文における用法と共通点を持っている。

これまでに挙げた -sa の4つの用法は図2に示す family resemblance をなしているものと考えられる。

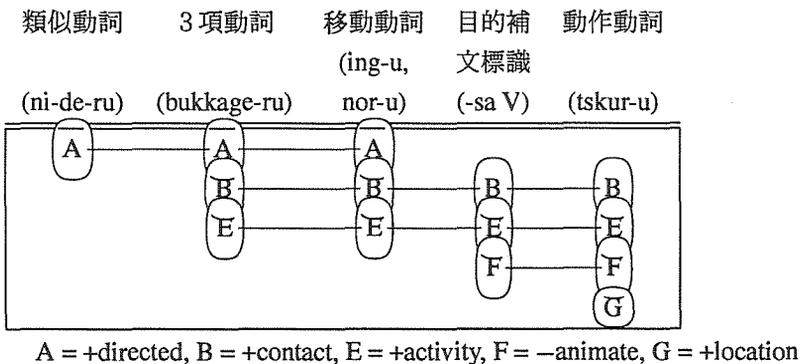


図2: -sa の用法間の family resemblance

2.3で述べたように-nganiは2つの用法を持っている。つまり、可能述語の経験者をマークする用法(用法1)と形容(動)詞文における「描写の基準」をマークする用法(用法2)である。-nganiの場合は、-ngeと-saの場合と異なり、格助詞の意味役割を定義するには古典的なカテゴリーを用いる方法で十分であると思われる。可能述語文においても、形容(動)詞文においても、-nganiでマークされる項は[経験者]と[描写の基準]という素性を持っている。[経験者]という素性は用法1と2の構文を「似る」構文と区別する役割を果たしている。[描写の基準]という素性は「いたい」「眠い」など、主観性の高い形容詞が-nganiを伴う項をとらない要因となっている。このような述語の場合は話者が自分の経験を直接表現するのに対して-ngani用いられる構文では述語の表わす属性は経験者を基準にして、間接的に表現されている。つまり、(27a)の場合は(27b)のように言い替えることができる。

(27) a. tosjori-nge samue-jo sottsi-wa

b. 年寄りにとっては寒いよそっちは(他の人にとっては違うかもしれないが)

「いたい」のような述語の場合、(27b)に対応する言い替えが不自然である。なぜなら、「いたい」と叫ぶ話者は痛さを相対的に捕えているのではなく、直接表現するからである。「いたい」と同じクラスには「眠い」「疲れた」が属する。

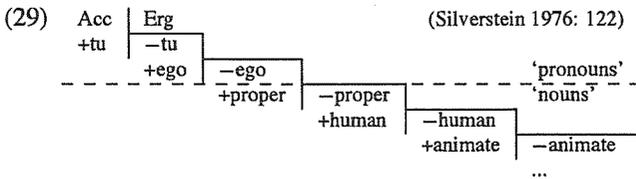
3 格助詞の分布上の重なり

3.1 -ngeと-saの分布上の重なり

-ngeと-saがほぼ同じ意味役割を担い有生性で対立する格助詞であることは、すでに見たとおりである。付属する名詞が有生のものを指す場合には-ngeが使われ、無生のものを示す場合は-saが使われる。もし、これがすべての場合に当てはまるのなら、同じ名詞には常に-ngeか-saの一方が付属し、どちらでも使えるということはあるはずである。しかし、宮島(1956)も指摘するように、実際には同じ名詞が-ngeをとったり-saをとったりする場合がある。それは、以下に示す例で使われる動物名詞などの名詞句階層上の中間領域に位置する名詞の場合である。

- (28) a. Nma-nge nor-u b. Nma-sa nor-u
 馬-与 有生 乗る 馬-与 無生 乗る

人間言語の名詞は、人称代名詞を一方の極とし無生名詞をもう一方の極とする連続体をなしているものと考えられている (Silverstein 1976)。名詞句階層は、下記の図に示すようにもともと分裂能格型言語における能格型格組織と対格型格組織の分布を説明するために考え出されたものだが、その他の文法現象の説明にも役立つスケールである。



水海道方言においても同様のスケールは有生連体修飾格 (-nga) と無生連体修飾格 (-no) の分布を考えるウエで有効である (佐々木&カルヤヌ 1997)。-nge と -sa の分布も名詞句階層を反映したのと考えられる。名詞句階層の両極に近い位置に分布する名詞の場合、-nge と -sa のうち一方しか付属することができない。

- (30) a. *ome-sa kure-ru 人称代名詞
 あなた-与 無生 あげる
 b. ome-nge kure-ru 人称代名詞
 あなた-与 有生 あげる
 c. *mitskedo-nge eng-u 場所名詞
 水海道-与 有生 行く
 d. mitskedo-sa eng-u 場所名詞
 水海道-与 無生 行く

NP-nge と NP-sa は、対格型格組織と能格型格組織がそうであるように、名詞句階層上の両極を出発点として中間領域で出会う形の分布をしている。そして、中間領域では、同じ名詞が同じ述語を主要部とする構文で -nge でマークされたり -sa でマークされたりする形で分布が重なっており、2つの形式の分布上の境界線を名詞句階層上に引くことができない。

- (34) a. enu-nge sa:N-na 有生名詞(動物)
 犬-与_{有生} 触るな
- b. enu-sa sa:N-na 有生名詞(動物)
 犬-与_{無生} 触るな

このタイプの場合、次に上げるタイプの場合と異なり、-nge と-sa の分布が重なる範囲が広く、名詞句階層上動物名詞から無生名詞にまで及んでいる。-nge が-sa の領域にまで乗り込んでいると同時に、-sa の方も-nge の領域まで乗り込んでいるのである。これらの構文は、着点として有生名詞と無生名詞のどちらもとることが可能なので、述語の概念構造に項の有生性に関する指定が含まれていないものと考えられる。このような構文の場合、話者の構文の解釈によって有生格が使われるか無生格が使われるかが左右されるのではないだろうか。つまり、着点が「乗り物(=無生物)」として解釈されるならば-sa が使われ、「動物(=有生物)」として解釈されるならば-nge が用いられるのではないだろうか。(33)の例で、現実世界においては明らかに無生物であるバイクに-nge が用いられているのは、無生物ではあっても動力を持っている点でより生物学的な解釈が可能な点と乗り方がまたぐ形であるため馬からの類推が働き得る点の2点が要因となっているものと考えられる。以下に示すように、同じ動力を持つ乗り物でもバスの場合には-nge を用いることができない。

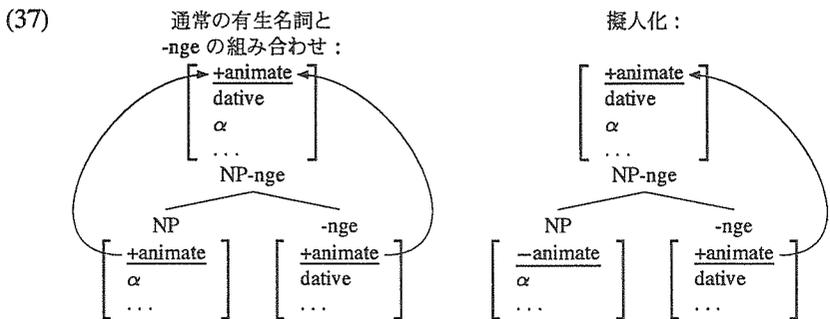
- (35) a. bas-sa nor-u 無生名詞(乗り物)
 バス-与_{無生} 乗る
- b. *basu-nge nor-u 無生名詞(乗り物)
 バス-与_{有生} 乗る

馬とバイクは乗る形態が似ているほか、基本的に「乗る人=操作する人」という構図が成り立ちやすい点でも共通している。バスは運転手以外の人間にとって「乗る人=操作する人」という構図が成り立たない点で馬やバイクと対立する。(35)の例文を教えてくれた話者は自分以外の人間がバイクに乗る場合 NP-sa を使うが、自分自身が乗る場合は NP-nge を使うのだと、2つの例の解釈の違いについて語ってくれた。こうした解釈を支えているのは馬とバイクが共通点を持っているためだろう。

もう一方のタイプの構文は、授受動詞を主要部とする構文である。このタイプの場合、(30)の例文と以下に示す例文が示すように、ゆれは境界領域でだけ生じる。

- (36) a. hodogesama-nge hana ange-ru 霊的存在
 仏様-与_{有生} 花-対あげる
- b. hodogesama-sa ange-be:-ka 霊的存在
 仏様-与_{無生} あげようか
- c. hana-sa mizu jap-pe 植物
 花-与_{無生} 水-対やろう
- d. ウエ木ゲ ミズ ヤル
 植木に水をやる(データは宮島(1956)より) 植物

NP-nge という形式は、典型的には名詞の有生性が高いときに用いられる。この場合、-nge の [+animate] と名詞の [+animate] が調和しているものと見ることができる。一方、有生性の低い名詞が NP-nge の形を取る場合は、-nge の [+animate] の素性が、名詞固有の有生性に関する素性を押さえて、擬人化の解釈を喚起するものと思われる。



連体修飾格の場合も有生格と無生格の分布は重なっているが(佐々木&カルヤヌ 1997)、下の図に示すように、与格とは重なり方が異なっている。連体修飾格の場合、有生格の分布領域が無生格の分布領域に覆われてしまっているが、与格の場合、これまでに見てきたとおり有生/無生の両極では分布は重ならず重なる領域は名詞句階層の中間領域に限定されている。この所有格と与格の有生格の分布上のずれは、言語特徴としての有生

まず、統語的な側面から見ると、この用法以外の NP-nge または NP-ngani は述語の項 (argument) であるのに対し、この用法だけが随意的な付加詞 (adjunct) である。述語の項である場合、NP-nge または NP-ngani の担う意味役割は、述語の概念構造にも存在しているものである。つまり、(39) の例でみると、hoNniN-nge の着点という意味役割は動詞の概念構造に含まれており、ore-nganja の経験者 (能力者) という意味役割は可能形態素の概念構造に含まれている。一方、付加詞の場合、それが担う意味役割は述語の概念構造には含まれていない。そのため、述語に含まれていない情報を構文に加える役割を果たしているものと考えられる。したがって、付加詞として用いられる NP-ngani/-nge においてこそ、-ngani や -nge の担っている意味的素性が顕在化し区別が明瞭になることが期待されるが、実際にはまさにこの用法において何人かの話者は -ngani と -nge のどちらでも使えると判断するのである。

次に意味的な側面を見ると、下の図に示すように他の NP-nge を用いる構文の場合どの用法でも NP-nge は [+directed] の素性を持つものと解釈されるが、この「寒い」「大きい」を主要部とする構文の場合だけこの素性を欠いている。一方、NP-ngani をもっぱら用いる構文から見た場合、この構文の NP-ngani(NP-nge) は、対象との接触 (「大きい」の場合) および気象・環境などとの接触 (「寒い」の場合) を含意する点で他の NP-ngani をとる構文と異なっている。

(41)

	α	β	γ	δ	ϵ	ζ	η	θ	
意味上の素性									
activity		+	+						
directed	+	+	+		+				
contact	+	+	+			+			
p.o.r.					+	+	+	+	
experiencer						+	+	+	
animate	+	+				+	+	+	
統語論上の位置づけ									
argument	+	+	+	+	+		+	+	
	-nge	-nge	-nge	-nge	-nge	-nge	-ngani	-ngani	-ngani

α = 「親切だ」、 β = 授受動詞、 γ = 移動動詞、 δ = 「向ける」、 ϵ = 類似動詞、 ζ = 「大きい、寒い」、 η = 「無理だ」、 θ = 可能表現

これは、対立するもう一方の格助詞が他の用法でもっている素性を帯びているということでもある。つまり、「寒い」「大きい」などの形容詞

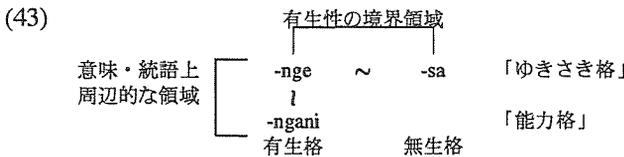
文で用いられる-ngani は、他の用法で-nge が持っている素性 [+contact] を持っており、逆に-nge の場合、他の用法で-ngani に見られるように素性 [+directed] が欠如している。便宜的に [+directed] の非在を [-directed] として示すと上記の関係は次のように表わすことができる。

(42) 形容詞述語文における-ngani と-nge の素性の共有：



上の図が示すように、この用法において-ngani は-nge と [+contact] を共有し、-nge は-ngani と [+directed] の非在を共有しているのである。この素性の共有が NP-ngani/-nge の揺れの一因ではないだろうか。

前節を含め、これまで、-nge の他の格助詞との揺れを見てきた。-nge は [+directed] を持つ用法では、対立する無生格-sa との揺れを示し、付加詞としての用法においては、本来意味役割において対立するはずの経験者格-ngani との揺れを示している。これを図示すると以下ようになる。



3.3 -ni とほかの格助詞の分布上の重なり (-ni でしか表わせない領域)

-nge/-sa および-nge/-ngani の分布上の重なりは何らかの意味で周辺的な領域に限られていた。-nge と-sa の分布が重なる領域は、名詞句階層の両極から見ての周辺、すなわち有生性の境界領域であった。また、-nge と-ngani の使用領域が重なるのは、大まかにいって2つの格助詞の中心的な用法である着点や経験者から逸脱した領域、すなわち意味役割の観点で周辺的な領域においてであった。一方、これらの格助詞が有生性または意味役割の観点から中心的と思われる領域で使用される際には、決して-nge/-sa の揺れや-nge/-ngani の揺れは起こらない。格助詞-ni も他の格助詞と分布上の重なりを示すが、-nge/-sa、-nge/-ngani の場合の分布上の重なりとは異なる

る様相を呈している。この節では、他の格助詞との分布上の重なりを含めた-niの用法を記述することを通して、この格助詞の性質を明らかにしたい¹⁰。

まず NP-ni でなければ表わせない表現を示すことにする。-ni は先行研究において「場所格」として記述されている。実際、存在文における場所は、NP-ni で表わされる。下の例文が示すように、このような場合、NP-ni を NP-sa で置き換えることは難しいとする話者が多い。2節で示したように、NP-sa もまた「場所」を表わすことができる。もっとも NP-sa が場所を表わすことができるのは行為動詞を主要部とする文である。NP-sa は、存在文では場所を表わせない。下の例文は NP-sa と NP-ni のアスペクトにおける対立を表わしている。

- (44) a. uzi-ni e-ru存在文 (状態)
 家-位 いる
 b. * utsj-sa e-ru存在文 (状態)
 家-与 いる
 c. kuwa-no aeda-sa tskut-ta-Nda-gedo-jo行為動詞文
 桑の間-与 作ったんだけどよ

以下に示す、時間を表わす NP-ni も -ngani, -nge, -sa で置き換えることができない。

- (45) ura-e hazizi-ni azumar-u
 裏-与 (工) 八時に 集まる

また、標準語の格助詞「に」の「変化の結果の状態」(鈴木 1972) または「述語転化補語」(城田 1993) の用法に対応する表現でも NP-ni がもっぱら用いられる。

- (46) a. musko esja-ni sj-ta. b. tonarimura-sa jome-ni eng-u
 息子 医者-位した 隣り村-与 嫁-位 行く
 c. Ndagara dore-mo ozitsjan-ni nat-tsja-Nda-jo-na.
 だから どれも 「オジサン」-位 なっちゃうんだよな

¹⁰-ni と他の格助詞との分布上の重なりは -de や -kara に関しても起こるが、ここでは -nge, -sa, -ngani との重なりを中心に考えることにする。

d. *wagae-ho:-wa, so:so:, o:ki:obasaN-ni naN-no.*

若い方-トピック そうそう 「オオキイオバサン」-位 なるの

e. *ojomesaN-ni nar-u hjto*

お嫁さん-位 なる 人

「変化の結果の状態」はある状態から別の状態への移行の結果生じるので、時間の領域において [+directed] の素性を含んでいるように思われる。上の例文ではいずれも有生名詞が変化の結果の状態を表わしている。付属する名詞が有生で意味上 [+directed] であるため、-nge が用いられる条件を満たしているように見えるが、これらの構文では -nge を用いることができない。類似述語文の類似の対象(「Xに似ている」の「Xに」)で NP-nge が用いられ、上の例文で NP-nge を用いることができないところを見ると、「対象名詞と同一指示の名詞は NP-nge」で表わせない」という制約があるように思われる。この制約が一定の妥当性をもつならば、この方言の格助詞の用法を規定するためには、意味役割上の素性と有生性の他、第3の要因として同一指示の問題も考慮しなければならないことになる。

その他、2節で示したように、標準語において起点や動作主などを表わす「に」に対応する表現もまた NP-ni で表わされ、-ngani, -nge, -sa では表わすことができない。以下に非派生的構文の例を示す。

(47) 非派生的構文において起点や動作主を表わす NP-ni

a. *darega-ni hku-demo morat-te. NP-ni = 起点*
誰か-位 服-対-でも もらって

b. *sajuri-nge morat-ta. NP-nge = 着点*
サユリ-与 もらった

c. **dorobo: ziNsa-nge tskamat-ta. *NP-nge = 動作主*
泥棒-主 巡査-与 捕まった

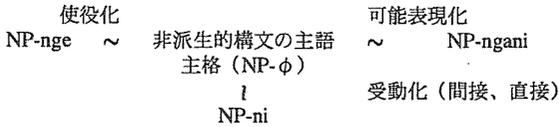
d. *dorobo: ziNsa-ni tskamat-ta. NP-ni = 動作主*
泥棒-主 巡査-位 捕まった

(47a, b) の非派生的な受益構文が示すように、このような構文で NP-ni と NP-nge を入れ替えた場合、異なる意味役割を担うものとして解釈される。すなわち、NP-ni は受益行為の送り手(起点)として、NP-nge は受け手

(着点)として。また、(47d)のように動作主を斜格で表わす非派生的構文における動作主も NP-ni でしか表わせない。

次に、派生的構文における NP-ni と他の斜格の用法を見ることにする。派生的構文において、非派生的構文で主格で表わされていた名詞句が斜格化する場合、3つのパターンがある。

(48) 派生による主語の斜格化のパターン：



他動詞文をもとにした使役文の被使役者は、NP-nge で表される。この場合の NP-nge は、使役形態素によって使役行為の受け手としての意味役割を付与されている。一方、可能形態素によって経験者 (能力者) としての意味役割を付与される項は NP-ngani で表わされる。それに対して、同じ動詞の派生に関与する形態素でも受動形態素は項に新たに意味役割を付与するのではなく、単に動詞の外的項を抑制するものと考えられる (Grimshaw 1990 など) が、この外的項の抑制によって斜格化した項は NP-ni で表わされる。「~てもらう」タイプの派生的受益構文と受動構文は主語が一方においては受益者として解釈されるのに対しもう一方においては迷惑を被った者として解釈されやすい点で意味的に対立するが、語幹部分の外的項が NP-ni になる点で共通している。

(49) 派生的構文

- a. jagi-nga tsjtsi uzi-zja kodomo-nge nom-ase-de-ru-jo. 使役文
ヤギの乳-対 うちでは 子供-与 飲ませているよ
- b. are-nganja e:ngo sjaber-e-N-nga ora sjaber-e-ne-na.
彼-経-トピック 英語-対しゃべれるが 私-主しゃべれないな
..... 可能構文
- c. seNse-ni ogor-are-da. 受動文
先生-位 怒られた
- d. *seNse-nge ogor-are-da. 受動文
先生-与 怒られた

- e. igi-ni hur-are-tsjt-te-jo. 受動文
雪-位 振られちゃったよ
- f. kodomo-ni joN-de morat-tara kappe-na ... 「～てもらう」タ
子供-位 読んでもらったらいいだろう イブの受益者構文
- g. *kodomo-nge joN-de morat-tara kappe-na
子供-与 読んでもらったらいいだろう
- h. oja-nge it-te mora:-no. 「～てもらう」タ
親-与 言ってもらうの イブの受益者構文
親に(に対して)言ってもらうの

(49e)の間接受動文における NP-ni は狭い意味では「動作主」とは言えない。しかしながら、このような自動詞文から派生した間接受動文では、「雪が降る」という事態が主格で表わされる名詞に影響を及ぼすものと考えられる。そのため、「雪が降る」という事態はその構文の概念構造における Action-tier の ACTOR として解釈されたり (Washio 1993:80)、派生のある段階における主語として解釈されたりする (Otsuka 1980)。したがって、行為・事態の起点である点では動作主と共通する部分がある。

このように、NP-ni でなければ表わすことのできない用法は、位置、時間、起点、動作主と意味的に多岐にわたっている。ゆえに、この形式を意味的に規定することは困難であると思われる。「当該発話の内容に於て、助詞に後接される語(名詞)が示す事柄が、他の事柄に対して周辺に位することを示し、「常に、中心的存在を予定、予想させながら、前接する語が示す事柄を周辺へと追いやり、それを傍系的、随伴的、アクセサリ一的と評価して、表出」という点では、城田(1981)がいうところの「周辺性」という特性を持つとは言えるかもしれない。しかし、こうした特性は、意味的素性というより当該形式が構文において文法格と対立する斜格であることを示す文法的な特性である。実際、これまでに挙げた全ての NP-ni をともなう構文において、NP-ni 以外の項の存在とりわけ主格や対格といった文法格で表わされる「中心的存在」が含意されている。もちろん、文脈上の諸条件により、文法格でマークされる項が「省略」される場合、表面的に NP-ni と述語だけの構文が実現することがある。上の例文の(49c, e, f)がそれである。しかし、このような省略を含む文でも、文脈上の

条件が整えば文法格でマークされる「中心的存在」は出現する。したがって、このように省略の結果 NP-ni と述語だけで構成される文ですら、文法格 (= 「中心的存在」) は潜在的な形で含意されているのである。省略を含む文においてすら NP-ni は「周辺の」存在といえる。

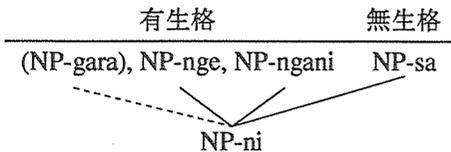
-ni はこの周辺性において文法格だけでなく -ngani とも対立する。2 節ですでに触れたが、この方言では標準語と異なり、自動詞を可能表現化した際、経験者 (能力者) が主格で現れる必要がない。

(50) ora-nganja ojong-e-ru.
私-経-トピック 泳げる

経験者は -ngani でマークされ、主格が潜在的にすら出現できない構文が可能である。つまり、「周辺性」の観点からすると -ngani は、必ずしも当該構文内に別の「中心的存在」を含意しないので「周辺の」ではない。

次に、-ni と他の格助詞との交替について考えることにする。少なくとも現在の水海道方言では、これまでに上げてきた NP-nge, NP-ngani, NP-sa を、命題の意味を変えずに NP-ni で置き換えることが可能である。

(51) -ni とほかの格助詞との置き換え関係:



この命題の意味を変えない交替もしくは揺れは、標準語の影響によって出てきた可能性もある。なぜなら、標準語の「に」は水海道方言の -ngani, -nge, -sa, -ni それぞれに固有の使用領域すべてをカバーする形式であるからである。しかしながら、この方言において古い段階でこうした交替が不可能であったことを立証することもまた資料上の制限により困難である。

その形式に固有の用法において有生性に関する制限がなく、意味的特性によっても用法を規定できない点で -ni と連体修飾格 -no は共通している。また、他の格助詞と置き換え可能である点でも、-ni は連体修飾構造で用いられる -no とパラレルである。-ni と -no は対立する -nga や -ngani, -nge, -sa に対して意味的に無標 (unmarked) な地位にあると言えよう。-no が無標の連体修飾格であるのとパラレルに -ni は無標の斜格なのである。

経験者格と与格は、意味的に用法を規定できる斜格である。一方、位格は斜格でありながら意味的に用法を規定できない。多くの場合、斜格であることと意味格であることは重なる。経験者格と与格はまさにこのケースであり、意味格的斜格と見ることができる。一方、NP-ni は非意味格的斜格として位置付けることができるだろう。

4 今後の課題

本稿では、水海道方言の4つの格助詞の意味的特性に着目しそれぞれの用法を分析してきた。これら4つの格助詞が文法関係や階層構造といった統語的な側面でどのように位置付けられるべきかという問題はさしあたり問題にしないできた。しかしながら、こうした側面は文法記述においてきわめて重要である。今後より多くの談話資料を集め、分析していく中でそれぞれの格助詞の統語的な位置付けを明らかにしていきたい。

-nge, -sa, -ngani, -ni と他の格助詞の関係も本稿では考察の対象から外した。しかし、1節ですでに述べたように、4つの格助詞が格助詞全体の体系の中でどのような位置付けであるのか決定するためにはこの問題を考察せざるを得ない。また、我々が記述のために用いたいくつかの素性が妥当なものであるか否かを検証するためには、-sa と -e、そして -ni と -de の対立について記述しなければならない。

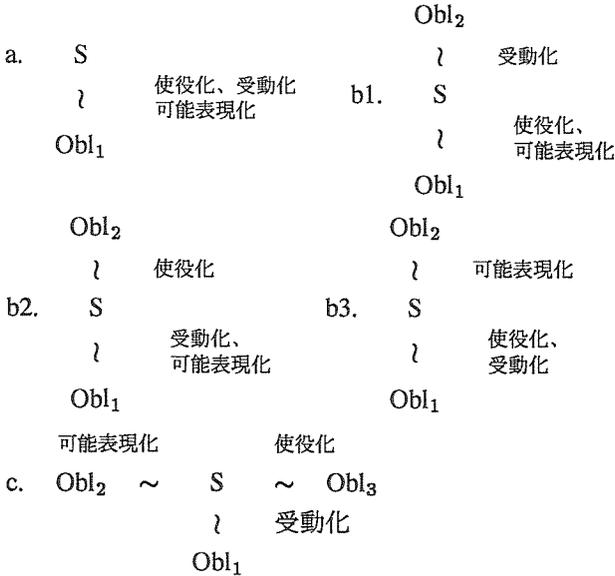
本稿では、もっぱら水海道方言と標準語の間の対照しか行わなかったが、今後は、非派生的構文の主語(主格)が派生によって斜格化する際のパターンについて、他の方言との比較対照を行っていきたい。水海道方言は3節に示したように3つの斜格化のパターンを持っている。標準語は形式上は「に」への斜格化1つしかない。この中間段階として2つの斜格化のパターンを持つ方言も存在すると思われる。斉藤(1940)が記述した山形県東田川郡山添村の方言は下に示すような形での2つの斜格化のパターンをもつ方言である。

(52) 山形県東田川郡山添村の方言における斜格化のパターン：

-サ	～	主語	～	-工
		使役化		受動化
		可能表現化		

仮に主語から派生的に生じる斜格を「Obl₁, Obl₂, Obl₃ (Obl₁ ≠ Obl₂ ≠ Obl₃)」とし、非派生的構文における主語を「S」で表わすことにしよう¹¹。以下に示すように斜格化のパターンは、1パターンしかない場合と3パターンある場合はそれぞれ1つの有り様しかないが、2つの斜格が関与する場合、論理的には3つのパターンがあり得る。

(53) 非派生的構文の主語を斜格化するパターン：



標準語が (a) のパターンであり水海道方言が (c) のパターンであるのは明白である。山形県東田川郡山添村の方言は (b1) のパターンを示している。(b) の他の2つのパターンは今のところ筆者の狭い見識の中では例を思い出すことができない。しかしながら、(b2) も (b3) もまったく存在しない斜格化のパターンとは考えられない。この2つのパターンについては今後さらに調査・研究を重ね、どの方言が当てはまるか明らかにしたい¹²。

¹¹それぞれの斜格の形式は地域によって -sa またはそれと関連する音声形式であったり、-nge またはそれと関連する音声形式であったりするであろう。水海道方言のようにこれに -ngani が加わる場合や、-kara と関連する形式が派生的な斜格の一角を占める場合もあるであろう。

¹²なお、山形市方言 (森山&渋谷 1988) のように構文の「自発化」による主語の斜格化をもつ方言の場合、上に示したパターンでは十分でない可能性がある。

日本語の方言が標準語の影響などによって急速に変わりつつある現在、方言における述語の派生にともなう格交替現象の類型化は、緊急に行わなければならない課題の1つといえるだろう。

【参考文献】

- Alsina, Alex. 1992. On the argument structure of causatives. *Linguistic Inquiry* 23. 517-55.
- Grimshaw, Jane. 1990. *Argument Structure*. Cambridge: The MIT Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- , —. 1993. The syntax of metaphorical semantic roles. In James Pustejovsky ed. *Semantics and the Lexicon*. 27-36. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Otsuka, Tatsuo. 1980. Passivization in Japanese. *Descriptive and Applied Linguistics* 13. 121-35.
- Rosch, Eleanor & Carolyn Mervis. 1975. Family resemblances: studies in the internal structure of categories. *Cognitive Psychology* 7. 382-439.
- Shibatani, Masayoshi. 1977. Grammatical relations and surface cases. *Language* 53. 789-809.
- Silverstein, Michael. 1976. Hierarchy of features and ergativity. In *Grammatical categories in Australian languages*. R.M.W. Dixon ed. 112-71. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- Uda, Chiharu. 1994. *Complex predicates in Japanese*. New York: Garland Publishing.
- Washio, Ryuichi. 1993. When causatives mean passive: a cross-linguistic perspective. *Journal of East Asian Linguistics* 2. 45-90.
- Wittgenstein, Ludwig. 1953. *Philosophical Investigations*. Oxford: Blackwell Publishers. (『ウィトゲンシュタイン「哲学的探求」第1部 読解』黒崎宏訳・解説. 1994. 産業図書.)

- 井上史雄. 1984. 「埼玉県の方言」『講座方言学5 関東地方の方言』飯豊毅一、日野資純、佐藤亮一編. 169-202. 国書刊行会.
- 宮島達夫. 1956. 「文法体系について」『国語学』25. 57-66.
- 一, 一. 1961. 「方言の実態と共通語化の問題点6 福島・茨城・栃木」『方言学講座第2巻』東条操(監修). 236-63. 東京堂書店.
- 森山卓郎・渋谷勝己. 1988. 「いわゆる自発について — 山形市方言を中心に —」『国語学』152. 47-59.
- 斉藤秀一. 1940. 「助詞のサとエ — 山形県東田川郡山添村の方言 —」『国語研究』8-9.
- 佐々木冠 & ダニエラ・カルヤヌ. 1997. 「水海道方言の連体修飾格」『言語研究』111. 59-83.
- 柴谷方良. 1978. 『日本語の分析』大修館書店.
- 城田俊. 1981. 「格助詞の意味」『国語国文』50-4. 43-56.
- 一, 一. 1993. 「文法格と副詞格」『日本語の格をめぐる』仁田義雄編. 67-94. くろしお出版.
- 鈴木重幸. 1972. 『日本語文法形態論』むぎ書房

Four Oblique Case Particles in the Mitsukaido Dialect

Kan SASAKI & Daniela CĂLUIANU

This paper describes the results of a survey carried out in Mitsukaido City and Iwai City in the Ibaraki Prefecture by the authors with the aim of defining the semantic conditions on the use of the four case particles, *-ngani*, *-nge*, *-sa*, *-ni*, used in the Mitsukaido Dialect in the area where Standard Japanese employs the unique case particle *-ni*.

The conclusion is that while *-ngani*, *-nge*, *-sa* have a semantic content which can be captured, if not in terms of classic categories, through the prototype approach, namely as family resemblances, the particle *-ni* in the Mitsukaido Dialect is semantically empty and functions as a default oblique case particle.

k1sasaki@lingua.tsukuba.ac.jp (Sasaki)

s925043@ipe.tsukuba.ac.jp (Căluianu)